細菌感染症診断のための免疫組織染色に用いる陽性対照標本作製と染色条件の検討

中丹家畜保健衛生所

○吉崎康二郎　加藤あかね

【はじめに】免疫組織染色（IH）は抗体の特異的結合を利用し、病原体や病態の進行状況等を確認できる有効な方法。染色の成立を証明するためには陽性対照（PC）が必須だが、各菌種に応じた染色性が均質なPCを野外症例から準備することは困難。さらに、当所では細菌、ウイルス等の抗原に応じて異なるIH用試薬を使用しており、試薬管理がそれぞれ必要であるため、非効率。【材料及び方法】①大腸菌O血清型6種及びサルモネラO血清型3種の計9種を、市販の鶏肝臓に注入し、PCを作製。②当所でウイルスのIHに用いる試薬について、PC 1種を対象に反応温度は37℃とし、反応時間を5、20、60分で染色性を比較し、細菌のIHへの反応を検証した上で、他のPC 8種及び野外症例の臓器切片1例で検証した条件での成立可否を判定。【結果】①自家作製したPCの染色性は均質であり、IHに使用可。②ウイルス用試薬の細菌のIHへの反応条件は37℃5分処理が最適であることをPC 9種及び野外症例1例で確認。【まとめ】今回、自家作製したPCは細菌感染症のIHに利用可能であることを確認。ウイルス等のIHに用いる試薬について細菌のIHでの使用における最適な条件を確認し、試薬統一による検査及び試薬管理の省力化を達成。今後は、ウイルスのPC作製を行い、当所におけるIH検査体制を更に強化。